

徽宗“坐井觀天”の地：依蘭冬紀行（1）

——黒龍江省にセーブルロードの軌跡を求めて——

室 田 武

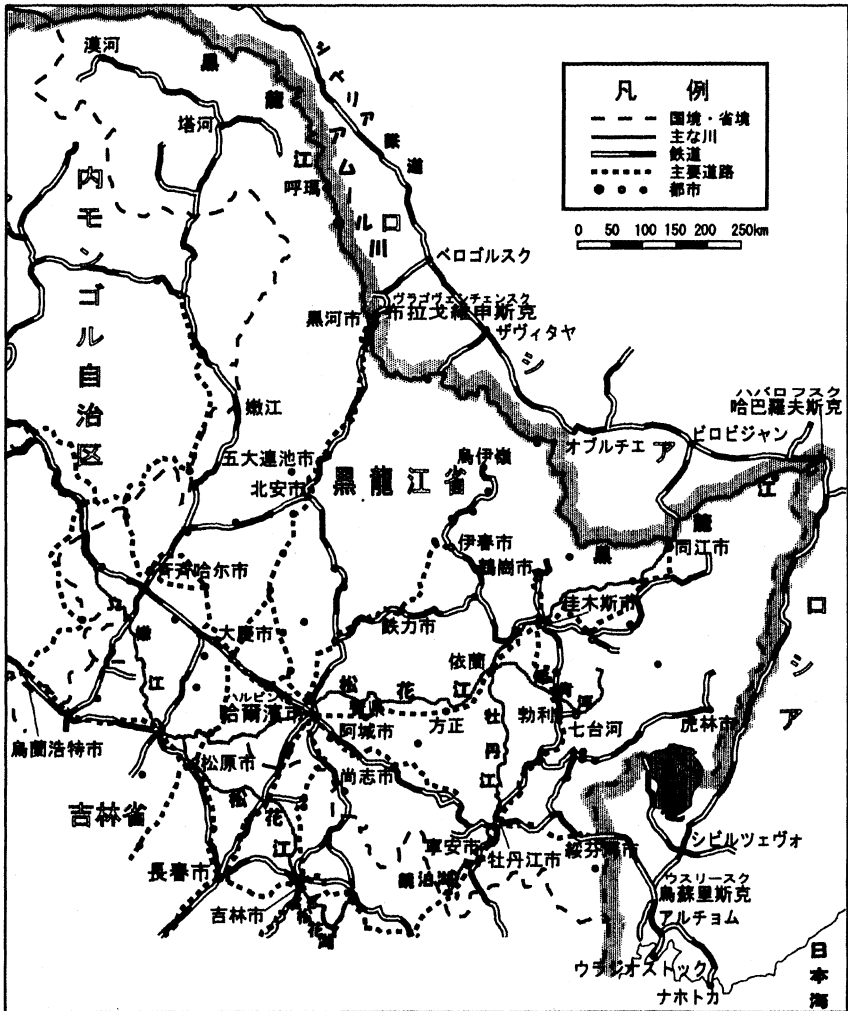
はじめに——本論考の概要

2002年1月6日朝、中国黒龍江省の省都・ハルピン市を發ち、その東方約250 kmにある依蘭県の依蘭鎮を訪ねた。目的は、本論考でセーブルロード（黒紹の道）と呼ぶ遠隔交易路の軌跡に、その一端でよいから触れてみることであった。

オホーツク海に注ぐアムール川（中国では黒龍江）の最大級の支流として松花江がある。依蘭鎮は、その松花江の右岸に牡丹江と倭肯河が注ぐ合流点の町である。この町において、そこが五国城遺址であることを示す石碑、依蘭県博物館、および回族の清真寺を見学することができた。本論考は、現地訪問以前に目を通していた文献、現地でのヒアリングと入手文献、帰国後に目を通した文献、の三者を再構成することにより、主として、セーブルロードの中で依蘭（旧名・三姓）がどのような歴史的意義をになう地域であったのかを検討するものである。依蘭といっても、今日の日本ではあまり有名でないが、東洋絵画史上の巨匠の一人ともいえる北宋の徽宗皇帝が幽閉され、歿したのがそこである。このことについても述べる。さらに、副次的ではあるが、石炭化学工業の盛んな依蘭の現況をも明らかにする。

日本史においては、三姓は、山丹交易の文脈で間接的に語られることがあるのみである。北海道開拓記念館の丹治輝一氏は、1993年、その視点から依蘭現地を訪問し、優れた記録を既に発表しておられる（丹治、1994）。これに対し本

黒龍江省と周辺の現況図



備考) 「中国分省地図冊」, 北京: 星球地図出版社, 1998年, 41-42頁に基き, 『ロシア地形アトラス』(ロシア語), モスクワ, 1997, 77頁, 82-83頁の情報を加えて作成。

論考では、クロテン（黒貂）という小型哺乳動物をめぐる国際政治、遠隔交易、およびエコロジーの三者が、そこで直接の結節点をなしていた空間として三姓を考察する。なお、紙面の都合で、(1)と(2)に分けて論ずることとする。

1 山丹交易の道を東端に含むセーブルロード

1980年代末以降、日本の歴史学、人類学等の分野における専門家の一部の間で、山丹交易に関する研究が、従前の域を越えて前進した。その理由の一つとして、ロシアのアムール川流域とも中国の黒龍江流域ともいえる地域での現地調査が昔より実施しやすくなったことが挙げられよう。また近年、環日本海文化やオホーツク文化といったことが巷間で語られるようになり、北東アジアへの関心が高まっていることも、もう一つの理由であろう。日本史上の文脈では幕末になって、中国史の文脈では清朝の後期になって急速に衰微した山丹交易について、それが盛んに展開していた19世紀初期に、樺太（現・サハリン）から小舟で大陸に渡り、その現場の一部を訪ねた日本人がいた。間宮林蔵（1775-1844）である。その彼が口述し、村上貞助が筆をとって製作された『東韃地方紀行』は、その生きた記録であるとともに、世界に通用する地誌の金字塔としても名高い。しかし、一度限りの間宮林蔵の現地探検で山丹交易の全側面がわかったわけではない。

その交易をどのような人々が担い、どのような物品がどこからどこへ、どのような制度的背景のもとに移動していたか、そしてそれらのできごとが周辺の自然環境をどのように変化させたか、等々を理解しようとする研究は、今後も国内外で続くであろう。なぜなら、今日では日本、ロシア連邦、中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国などと称される国々に属する諸地域や諸民族が、どういう経過を経て今そういう形になっているか、なぜ、それらの地域の生態系は今ある姿になっているのか、そして今後どうなるのか、等々の問題を経済人類学的に考察する上で、山丹交易の歴史がそれらの諸問題と全く無関係とはいえないからである。

とはいえ、本論考における私の関心は、山丹交易そのものではない。ここでの関心は、セーブルロード（黒貂の道）にある。

ロシアの考古学者シャフクノフは、黒貂（クロテン）の道、あるいは英語で The Sable Road と呼んでよい遠隔交易路があったという。「絹の道」ないしは「シルクロード」については既に多くのことが語られているが、彼によればそれより北方で「黒貂の道」が機能していたというのである（Shavukunov, 1992；シャフクノフ, 1993）。そして、その東の終点は日本列島にあったという。

これは、まだ世界の歴史学界の定説になってはいないが、興味深い仮説である。いくつかの歴史的事実や傍証により、私はこの仮説を支持するのであるが、彼の議論には一つだけ留保したい問題点がある。シャフクノフ（1993, 95頁）は、「14世紀末、モンゴル帝国の崩壊に伴い黒貂の道も永久に機能しなくなったと思われる」と述べている。この主張は、その交易路で活躍した商人たちの中で、主軸を担ったのはソグド人であると考える限り、妥当に思える。

しかし、アジアやヨーロッパにおいて、黒貂の毛皮を珍重する人々が14世紀末以降いなくなってしまう、などということはいえない。それどころか、21世紀に入った今でさえ、黒貂の毛皮といえば、その価値を知る人々の間では貴重この上ない世界商品の一つである。そして、需要がある限り、それを供給しようとする人々がどこかにいて、誰かが需給の間を橋渡ししようとするはずである。

将来私が本格的な研究テーマの一つにしたいと考えているのは、シャフクノフが14世紀末には機能しなくなったとする黒貂の道とは、「前期セーブルロード」と仮にここで名づけるものであって、それには後期があり、前期とは形を変えて19世紀半ば過ぎまで存在し、その後は輸送手段の高速化・多様化などの要因によって、主要道と呼べるようなものがどこか、はっきりしなくなっているものの、黒貂の毛皮は、依然として北東アジアからヨーロッパにかけての遠隔交易の対象であり続けているという仮説の検証である。すなわち、ここでは仮に「後期セーブルロード」と呼んでおく遠隔交易路の研究である。本論考は、

そのための第一歩である。山丹交易は、黒貂の毛皮をめぐる交易ではない。したがって、それ自身は後期セーブルロードの一環というわけではない。ただし、間接的にはそれに深く関係している。このため、本論考では山丹交易にふれる機会も少なくないことをあらかじめ記しておく。

山丹交易の実態調査のため、1809年（文化6）、樺太から大陸に渡った間宮林蔵は、アムール川右岸の町・デレンに到達し、そこが清朝の役人とサンタン人が直接に出会う現場であることを知る。彼はそこを「満州仮府」と呼び、『東韃地方紀行』中二巻において、そこで聞いた話を次のように紹介している。

「官夷と称する者は此处より里程〔不詳〕を隔たるイチャホットと称する処の者にして、夏月毎に松花江を下り〔官夷林蔵に与へし書中に載する処〕マンコー河に達して、六月中旬頃此处に來り、初秋の末より中秋の初既に府を閉て帰り去ると云。すべて府中に越年する者ある趣にあらず。」（間宮・村上，1988，137頁）

ここに登場するイチャホットという地名について、洞富雄と谷澤尚一は、「黒龍江下流域は吉林將軍に属する三姓（San-hsing 【San-shing の誤植か。Sanxing とも記される一室田・注】）の副都統の支配下にあつたので、イチャホットは三姓である。清初、新付のゴルジ族中の三氏をここに移したので、三姓の名がおこつたという」（間宮・村上，1988，149頁）。

私が前々から現地を訪ねてみたいと思っていたのは、ここで間宮林蔵がイチャホットといい、国内外の多くの文献がふつうは三姓と記している所である。彼が探検行を試みたのはデレンまでであつて、三姓には行っていない。彼以降も、江戸時代には、日本人で三姓まで實際行つた人はいないようである。しかし、そこがどういうところか関心を寄せた日本人は間宮林蔵以前にもいた。後述するように、幕命を受けた最上徳内と中村小市郎らである。

そうした江戸時代の人々とは別に、その地域に私が特に興味をいだいたのは、

本論考で前期セーブルロードと呼ぶ遠隔交易路の重要拠点の一つである三姓(現・依蘭)の成立に関するシャクノフの次の記述である。すなわち、彼のロシア語(あるいは英語?)論文からの鈴木明美による訳文は、

「五国部民族について触れている中国の史料によると、ムダンジャン川をスンガリ川が合流した所、すなわち現在の依蘭(訳者注:中国の地名)地域に五国部を造ったこの民族はソグド系であったらしい。」(シャクノフ, 1993, 93-94頁)

と述べている。この訳文において、ムダンジャン川と記されているのは牡丹江のことで、スンガリ川は松花江であるが、それらの合流点にソグド系の人々が五国部を造った、というのはどういうことであろうか。

そういう疑問の念が募って、2002年1月、中国の黒龍江省依蘭県を訪ねることにした次第である。

2 北京, 長春, 哈爾濱から依蘭へ

依蘭への旅に関し、日本から同行してくれたのは、林永輝(同志社大学大学院総合政策科学研究科博士後期課程)と泉留維(東京大学大学院総合文化学学科博士後期課程)の二人である。2002年1月3日、私たちは関西国際空港から北京へ向かった。夕刻、北京の空港に着いた私たちは、林の友人・孫さんの出迎えを受け、同氏の運転するクルマで北京駅に送り届けてもらった。北京駅を見るのは、私にとっては1987年以来のことで、当時に比べるとずいぶんきれいになっているという印象を受けた。空港から駅までの道が交通渋滞になっていたら予定した長春行きの列車に乘れなくなる。これを私たちは心配していたが、渋滞はなく、発車までに少し時間の余裕さえあったので、駅のファーストフードの店で軽い夕食を摂ることができた。

こうして20時30分発の長春行き夜行列車に乗車した。軟座のチケット、つま

り寝台車の切符を事前に孫さんが購入してくれていたもので、ゆったりと一眠りできた。

翌1月4日の朝、定時の6時55分きっかりに列車は長春駅に着いた。吉林省出身の林が沖縄で日本語研修を受けていた時代の友人・王さんがクルマで出迎えてくれた。ホテルまでの道沿いに氷の彫刻を幾つか見かける。ついに中国東北地方にやって来た、という実感が湧く。松苑賓館（Song Yuan Hotel）にチェックインする。ロシアでもそうだが、中国のホテルでは、朝からでもチェックインでき、これは旅行者にとってはありがたいことである。

吉林省の省都・長春市は、松花江の支流・伊通河が南北に流れる都市である。市街地の中心は、この川の西側（左岸）にある。この日は偽滿皇宮と吉林大学地質宮博物館を見学した。長春では、行く先々で偽〇〇という建物表示が目立つ。これは、かつて日本の関東軍が、清朝の廢帝・愛新覺羅溥儀を擁立して傀儡政府を作り、満州を支配したからで、その時代に作られたものは全て偽の名にふさわしいという考えによる、と私は理解した。

翌1月5日朝、長春8時18分発の齊齊哈爾（チチハル）行き列車に乗車。その日に向かったのは、黒龍江省の省都・ハルピン市である。薄く雪をかぶった農地が、鉄路の両側に見渡す限り続く。そこを列車は、北へ北へと疾走する。中国語にも訳されているという高杉良『生命燃ゆ』の主人公が、大慶油田を目ざして旅する場面を思い出す。完全に凍結し、その上を雪がおおっているものの、明らかに川とわかる所が二箇所あった。地図と対照し、欽馬河と松花江であることがわかった。定時のハルピン着で11時30分頃であった。長春の王さんの友人であるという朱さんが出迎えてくれた。

昼食後、冬でなければ市街地の北を西から東に向かって、とうとうと大量の水が流れているはずの松花江を見に行った。寒気の十分に厳しいハルピンであったが、川沿いに大きな広場があり、その先は河川敷公園のようになっている。たくさんの人々が遊んでいる。スナック類を売る露天の店も繁盛している。低い堤防らしき地形を利用して氷の滑り台があり、親子連れが、歓声を上げな

がら次々と滑り降りる(写真1)。スケートリンクのような氷上では、若い人々がコマ回し競争にうち興じている。櫓で遊ぶ子供たちもいる(写真2)。全面凍結した松花江は、はるか遠方まで広がり、対岸と見えたところは、あとで地図を見ると中州に過ぎなかった。そういう風情は、ロシアのハバロフスク(今の中国語では哈巴羅夫斯克、旧名・伯力)と似ている。ハバロフスクの場合、川は松花江と合流した後のアムール川であるが。

そこからタクシーで民俗博物館へ急行したが、16時閉館の直前の到着となり、建物内の展示物を見ることはできなかった。ただし、塀の内側の庭園を歩くことはできるということで入場した。そして、文廟と呼ばれる建物の外観を見ることができた。孔子像が建っている。私も林も泉も、学業途上の身である。各々の学問の進展を、その前で祈願した。

市街地にもどると、そこもまたたくさんの人々で賑わっている。内部に色とりどりの光源の入った氷の彫刻が、「中央大街步行街」という名の歩行者天国の両側にズラリと並んでいる。石畳の街路や周囲の建物のたたずまいが、いくぶんヨーロッパ風で、ここでもまたロシアに近いことを感じる。その夜は、中国人民銀行哈尔滨中心支行干部培训中心(Harbin Cardres Training Center of the People's Bank of China)というホテルに泊まった。

翌1月6日の朝、いよいよ依蘭をめざして出発である。先述の朱さんの友人の韓さんとそのまた友人の費さんが案内役となり、若い運転手氏を雇い、やや小さめのワゴン車でホテルを出る。ハルピン市は、トロリーバスが普及している街である。それには「緑色交通」の名がついている。1960年代初めころまで、日本の東京では都電と並んでトロリーバスがずいぶん走っていたが、今では見る影もない。それはともかくとして、私たち一行は、市街地を抜け、東へ向かった。曇り日であったが、風はあまりなく、道路の条件はさほど悪くない。除雪の行き届いた自動車専用道は「同三公路」といって、黒龍江省内の主要道の一つである。

ハルピンは一時代前の中国語では哈爾濱だが、今では簡体字で哈尔滨と記す

のが普通である。街並みが松花江の右岸に展開する大都市だ。その西方の大安市方面から東に流れ下る松花江は、ハルピンを過ぎてもおおむね東へ向かい、やがて北東方面に流路を転じ、同江市で黒龍江本流に合流する。黒龍江（Heilong Jiang, ヘイロンジャン）は、中国人がその川を呼ぶときの名称であり、対岸のロシア人にとってはアムール川である。同江市からハバロフスク市まで、地図上の直線距離は250 kmにも満たない。

運転手氏は、20歳前後の若者で、いくらでもすっ飛ばしそうだが、外国人を乗せていることを意識してか、まあまあの安全運転である。ハルピン方面と上述の同江市を結ぶ同三公路は、松花江にはほぼ並行して、しかし、賓県、方正県では川筋のだいぶ南を走る形で建設されている。道路標識には英語も併記されていて、Tongsan Highway とある。同三の同は同江市を意味するようで、これはわかりやすい。だが三はどうか。黒龍江省やその南の吉林省の地図をよく見ても三の字がつく主要都市らしい地名は見つからない。同乗している中国の人たちにしつこく質問したところ、海南島の地名だというのだが、あまりにも遠すぎるような気がして、その時は納得がいかなかった（この点については本論考の(2)で後述する）。

公路の名称はともかくとして、私たちがめざしたのは、同江市やハバロフスク市ほど遠方ではなしに、方正県の東隣りの依蘭県である。時代が三、四世紀くらい遡ることになるが、明も清も北方の少数諸民族に対しては朝貢政策で臨んだ。彼らに朝貢することを求め、それに応じるならば多大な恩賞を授ける、という外交政策である。それは貢ぎ物と恩賞というモノのやりとりに支えられた外交であり、さらに、そういう儀礼的なモノのやりとりの機会を利用して、一般的な商品交換も行われた。清の場合、辺民政策という名の下で、現代の経済人類学者などのいう遠隔交易が北東アジアのかなり広大な地域で展開されていたのである。

明朝は、その辺民政策の出先機関を寧古塔に置いた（丹治、1991）。清朝の辺民関係業務の拠点は、1780年、寧古塔（現・黒龍江省寧安）から三姓（現・依蘭）

へ移された。寧古塔は牡丹江沿いの町で、鏡泊湖の下流にある。ただし、今日の牡丹江市よりはやや上流部の町である。これに対し三姓は、牡丹江をずっと下って、それが松花江と合流する地点の町である。

歴史は歴史として、私たちのクルマは賓県を過ぎ、方正県へ入る。それまで道の両側が主としてトウモロコシ（中国語で玉米）畑だったのに対し、森が多くなる。それまではほぼ平らであるか、ゆるやかな起伏をなしていた地形は、やや起伏に富んだものへと変った。森林には落葉樹が多いが、常緑針葉樹もかなりある。時々シラカバやカラマツもある。東シベリアの風景に少し似ているように感じる。道沿いに、「植樹造林」、「封山育樹」などのスローガンを記した掲示板が次々に現れる。そういう掲示板を出しているのは方正県林業局である。方正県は林業の盛んな県で、商業伐採が進んでいる印象を受けた。

得莫利（Demoli）という所で昼食となる。得莫利は昔から狩猟動物がたくさん棲息していることで有名だという。道路沿いに広場があり、土産物を売る露天の店がズラリと並んでいる。広場の奥にレストランの建物があるが、その前には極めて多数のキジがつり下げられて背ぞろいしている。キジだから当然オス鳥の色彩が目立つが、よく見るとメス鳥もいる。ペアで売買する習慣らしい。

地図をよく見ると、得莫利の街は同三公路より北5 km くらいの松花江右岸沿いにある。夏には舟運でにぎわう所なのかもしれない。その一方で、哈同山泉大酒家というそのレストランは公路沿いで、郊外にあり、乗用車やトラックで移動する人々が立ち寄る店のようだ。昼間から大繁盛している。数え切れないほど多種類の香辛料や野菜類でうまく味付けされたコイの大皿料理を中心に、様々な料理がやってきて、昼食がこんなに豪華でよいのか、驚くほどであった。そのコイ料理は、特においしかった。

昼食の丸テーブルを囲んでいろいろ話が弾んだが、韓さんが最近参加したというハバロフスク旅行の話には特に興味をそそられた。鉄道でハルピンを発ち、東に向かい、国境を越える。鉄路はそこから少しするとシベリア鉄道の駅と接続する。そこからは、シベリア鉄道で烏蘇里江、すなわちウスリー川沿いに進

んで、あっさりハバロフスクに着いてしまうのだそうだ。そこで数日間、自由に滞在して、同じ経路でハルピンに帰る。出発から帰着まで一週間で、宿泊費も含めた総費用が2000元だそうだ（日本円に換算して3万円といったところか）。もし行きたければいつでもそういう格安ツアーをお世話しますよ、という。

この鉄道を地図で詳しく見ると、ハルピンから東南東に延びている。そして阿城市、尚志市、牡丹江市を通り、綏芬河市に至る。そこで国境となり、鉄道は南東に向きを変える。そして、ウスリースク（中国語では烏蘇里斯克）でウラジオストック始発のシベリア鉄道に接続することになる。ウスリースクからこの鉄道はおおむね北北東へ向い、興凱湖（ロシア語ではハンカ湖）の東方を走り、その後はほぼウスリー川に沿って進み、ハバロフスクに至る。ウスリー川が黒龍江、すなわちアムール川に合流する地点に拓かれた街がハバロフスクである。

同行の中国人同士の会話を聞いていると、内容は全く理解できないものの、ジャムスーという地名が頻繁に出てくる。佳木斯と書く。どういうところなのかたずねてみると、依蘭から同江市に行く途中の工業都市で、製紙業が盛んであるという。タバコ産業も大きいという。同行の費さんは、ハルピンのタバコ専売公社が勤務先で、タバコの密売取締りの仕事をしているとのことであった。その関係で、タバコ工場のある佳木斯にはよく出かけるのだそうだ。

私たちのテーブルは二階であったが、食後、一階奥の調理場をのぞかせてもらった。大きなコイが十数尾は泳いでいる水槽があり、その奥では若い料理人や助手の男女六、七人が鉄鍋や調理台の前で元気に働いており、湯気がもうもうと立ちこめている。食材の数も多い。見ているこちらまで力が湧いてくるような光景であり、許可を得た後に、デジタルビデオカメラで、狭いけれども活気あふれるそのキッチンを撮影させてもらった。

3 五国頭城の地としての三姓（依蘭哈喇）

レストランから外の広場に出ると、恐ろしく寒い。風が出てきたようである。それでも露天商の人々は、元気に客を呼ぶ（写真3）。干しシイタケならぬ干し

マツタケを少々買い求めた。同三公路を依蘭に向かって再び走り出すと間もなく、凍結した川が見えてくる。地図と対照して、それが牡丹江であることがわかった。その橋を渡ってまもなく、公路を下りて左折し、一般道を少し北に向かって走ると、そこはもう依蘭の町であった。メインストリートの両側に3—6階建てくらいのアパート群が並ぶ。クロテンの毛皮の痕跡でもないかと車窓から外に眼を凝らすが見えるのは寒気にもかかわらず結構にぎやかなクルマや人の往来、そして商店とアパートだけである(写真4)。

こういう場合、書店で本を探すしかない。小さな書店が右手に一軒、左手に二軒見えたような気がした。それはそれとして、ハルビン市を発つ前に得た情報として、依蘭の歴史を語るのは五国城遺址らしい。街並みを抜けると左手に、朱塗りの小さな四阿が見える。寒風がそのまま吹き抜ける建物である(写真5)。屋根はもちろんしっかりしていて、その下のわずかな壁面に絵が描かれ、わずかながら文章もある。とはいえ、がっちりしているのは、建坪わずか2〜3坪ほどの四阿の中心に鎮座している石碑である。そこには、「省級重点文物 五国城遺址」の文字が刻まれている。

とはいえ私は、セープル・ロードの痕跡を求めて依蘭にたどり着いたわけで、中国史や中国東北史に関して特段の知識は無いに等しい。五国城と刻まれていても、その歴史的意義がその時はあまりわからなかった。宋の徽宗皇帝に何か関係ある土地らしい、くらいがその場で読み取れただけだ。せめてもと思い、石碑の裏面の文字列をデジタルビデオカメラで撮影した(写真6)。シャフクノフ論文に導かれてついに依蘭までやって来たのだが、極寒の大気に向けて、当該論文の内容のかなりの部分を忘れていた。四阿の後ろはミニチュアサイズの丘のような岩山である(写真7)。その周囲にあちこちに溶岩が散りばめられていたような気がする。渤海国滅亡の主因ではないかとされる長白山(白頭山)大噴火が散布した火成岩の一部がここにあるのだろうか、と想像した。

いずれにせよ、その日のうちにハルビン市に帰着するという予定を変更することはできない。本格的な歴史資料を何も示していない四阿と石碑だけ見学し

て帰国するのは残念という気がした。そこで、車窓から見えた書店の一つに入った。この町に博物館のようなものはないのですか、と店員に尋ねると、あるとの返事。同行の韓さんは店主と何やら交渉している。高校生くらいの少女が博物館の場所をよく知っているらしく、店主は、その子が私たちをそこに案内するためにしばらく店を離れることを了承してくれた。彼女が車に乗ってしばらく走ると、前方に広い敷地の大きな建物が見えてきた。それが依蘭県博物館だというのが、あたりに人の気配はなく、休館らしい。

それでも案内の少女は、鉄柵の一部にある通用門から庭へ、そして建物横にある通用口へと入っていく。中には人がいた。外観の立派な建物であったが、内部もしっかりしている。確かに休館日であったが、館員は何かの仕事でその日もそこに来っていたのである。そして、見学してよいという。

正直に言って、博物館は建物が立派な割には展示のほうは貧弱に感じられた。考古学的な出土品を初め、あれこれ展示はあったが、実物は省レベルの博物館等、他の博物館に所蔵されていて、コピーのみが置いてある、といった例が多かった。その中に、どこかで見たような絵、というよりその写真があった。清朝の役人に対して別の民族が朝貢に向うてきた場面を描いた彩色画の、かなり不鮮明な写真である。絵柄はどうやら東洋文庫版の間宮林蔵・村上貞助『東韃地方紀行』にある多数の絵の一つのように思えた。ただし、その文庫の図版は全てモノクロなので、カラー写真の絵が間宮林蔵のものなのかどうか、自信がなかった。そういう点の説明文もないのである。とはいえ、これは私の無知によることで、間宮林蔵の絵は、原画は全て彩色画であることが帰国後にわかった。

この博物館における最もまとまった展示は、意外なことに毛沢東の写真であった。依蘭県出身の写真家で、毛沢東専属となることを許可された人がいた。そのカメラマンが撮った毛沢東の若い頃から晩年近くに至るまでの写真数十枚の展示は圧巻でさえあったが、どうやらこの博物館でセープルロードの軌跡に関し、新知見を得ることはできないと感じた。しかし、休館日にもかかわらず、

私たちに見学させていただき下さった方々のご好意はありがたかった。

依蘭の町でもう一箇所見学したく思ったのはハルピンで見た黒龍江省ガイドブックに記されている清真寺である。あたりはもう暗くなりかけていたがそこへ向かった。屋根の形が美しく、かつ重厚で、全体としてとても端正な寺で、敷地の感じは四合院住宅の場合と似ている。寺とはいっても仏教のそれではなく、イスラム教の寺院である。

建物の一部が住居になっているので、案内を乞うと、日本式に言えば住職といった感じの中年の男の方が出てきて、突然の訪問にもかかわらず、快く清真寺の説明をしてくださった。依蘭には回族、すなわちイスラム教徒がかなり住んでいるとのことで、毎日礼拝に来る人もいるという。回教が、いわゆるアラブ世界をはるかに超えた世界宗教の一つであることを、そこで改めて感じた。

正面の門の延長のような建物の中が何やら倉庫になっている。乗物らしきものがある。林の通訳によると、それは、日本の霊柩車に似たものであるという。そして、それは清朝からの貴重な賜り物なのだという。

詳しいことはわからなかったが、清朝の下では、回族はくらしやすかったという。清を建国したリーダーたちの祖先の一部は、今日の依蘭県に当る地域の出身である。乾隆帝の時代のことであるが、清朝の皇族か高官か、私にはよくわからなかったが、そういう人が祖先の地を訪ねたことがあった。その往路でのことか復路でのことかわからなかったが、何か災難に遭った。その際に、回族の人々が急場を救った。それを恩に感じた清朝が、回族の信仰拠点である清真寺に対して貴重な乗物を下賜し、回族への謝意を形にしたのだという。

寺はもう夕闇に包まれている。その裏手至近の所が松花江右岸の堤防であった。そこに、先に同三公路上から見た牡丹江が左手から合流しているらしい。なにしろ、すべてが凍結していて、しかも薄雪をかぶっている。川といっても何も流れているわけではない。右手下は広い低地だが、それが川かどうかわからない。もし川であるとすれば、地図から見て倭肯河のはずである。

光量がわずかでもある程度まで映像の残るデジタルビデオカメラで辺りを撮

影しようとするものの、指先が氷の小塊になってしまいそうなほど冷たく痛い。

クルマにもどり、寒風の中をそこまで案内してくれた少女を、もとの街中の書店に送り届ける。彼女を二時間近くも勤務から外してくれた店長に謝意を述べるとともに、『依蘭歴史文化名城系列叢書』の名の美装箱に入った五巻本を、内容確かめるとまもないまま、私も泉も購入した。

その後は、同三公路に戻り、一挙に哈尔滨市へ帰着した。

翌1月7日、哈尔滨市内での昼食をどこにしようかと、日本からの三人で話しながら街を歩いていたら、他の多くの看板の中に清真飯店という看板が目についた。林によると、清真とあったら、たいていの場合、回族に関係するという。昨日は依蘭で清真寺を訪ねたのであるから、今日は哈尔滨市の清真飯店で食事というのもいいのではないかということになり、その小さなレストランで美味しい料理を楽しんだ。

以下は、哈尔滨市から再び長春市に戻り、そこから林の故郷である吉林市を訪ね、北京経由で帰国してからのことであるが、清真寺の、修復を要するあの文物は、いったい何だったのだろうか、と気がかりになった。

乾隆帝の時代といっても、その場では清の皇帝にそういう人がいたな、という認識しかできななかったが、帰国後に参照した年表では、在位1736—1795年の高宗の時代が乾隆年間である。宋・孫（2001, 90頁）によると、1737年（乾隆2）4月、回族の人々が資金を出しあって清真寺を創建した、とあるから、以上の出来事はそれより後のことと考えてよい。

林に、あの住職さんとういふ話をしたのかもっと正確に教えてくれるよう頼んだ結果、先ずわかったこととして、日本式には住職の感じを受けた男性について、回教の「僧侶」に相当する言葉は「阿訇」（a-hong）であるという。つまり私たちは、清真寺の阿訇にヒヤリングをしていたわけである（写真8）。その場で私が、とりあえず日本の霊柩車に相当する文物と理解したものは、林によると、正しくは「龍鳳棺罩」であった。

乾隆帝が清の皇帝となる少し前に、祖先の地を参拝する旅に出た。その地とは、馬大であり、今日の依蘭鎮の西方を流れる牡丹江の、さらに少し西の村である。その途上で、盗賊か、それに類する一団の襲撃を受け、危機に陥った。それを見た回族の人々が一行を救助した。その後、清朝の高宗として即位した乾隆帝は、彼らに恩義を感じ、お礼をしたいが何を望むか、ということをし、どういう方法でかわからないが、回族の人々にたずねた。それに対する答が「龍鳳棺罩」であった。ただの棺ではない。この場合の龍は皇帝、鳳は皇后を意味するという。

この林の解説を聞いて、清真寺の阿訇が近々なんとかそれを修復したいと考えているといていた意味がようやくわかった。おそらくそれは、寺宝といつてよいものなのであろう。

4 シャフウノフのセーブルロード論

依蘭現地できずに、帰国してからの課題となった点がもう一つある。それは、五国城遺社の石碑裏面に刻まれていた文章の読み取りである。写真6は、私がデジタルビデオカメラで撮影したもので、これで八割程度は読み取れるものの、全文は判明しない。そこで、林と泉がそれぞれ撮っていた写真と照合した結果、全部の文字が次のように判明した。

五国城遺址据載為金代胡里改（鶴里改）

路故城，城址略呈長方形，城垣夯築。周長二二〇〇余米，東近倭肯河，北臨松花江，西瀕牡丹江，以倭肯哈達山和拉哈府山為東西屏障。公元十世紀遼代設五国部節度使管轄今依蘭以東的松花江，烏蘇里江和黑龍江下游地区。金滅遼後，在此設胡里改路。据伝宋朝徽，欽二帝曾被金廷囚禁於此。

これを日本語で言えば、次のような意味である。

「五国城遺跡は、文献記載によれば、金王朝の胡里改（別称、鶻里改）路の城跡である。城の敷地はほぼ長方形をなし、城の壁は土で突き固めて築造されていた。周囲の延長は2200メートルあまりであり、その東側は倭肯河に近く、北は松花江に臨み、西は牡丹江に面し、倭肯哈達山と拉哈府山が東西の障壁となっている。西暦紀元10世紀、遼王朝は五国部を設け、節度使を遣わして、今日の依蘭以東の松花江、烏蘇里江（ウスリー川）および黒龍江（アムール川）下流域を管轄した。金が遼を滅ぼした後、ここに胡里改路が設けられた。伝聞に依れば、宋王朝の徽宗、欽宗の二皇帝は捕囚となってここに幽閉された。」

以上の碑文から五国城の歴史的位置がごくぼんやりとではあるが見えてくる。この依蘭地域の歴史の概略を帰国後に調べてみると、先ず次のことがわかった。すなわち、依蘭について郭（2001）は、

698年、唐の地方政権の地となる
 渤海政府の下で德里府となる
 遼代には五国頭城として著名
 金代には上京路管轄下の胡里改路を成す
 元代には胡里改衛万户府ならびに斡雜万户府となる
 明代には斡雜里衛ならびに胡里改衛となる
 清代には三姓副都統の役所となり、宣和元年に至るまで東北路分巡兵略道を構成した

と述べている（1-2頁）。周・王（1999, 17頁）に依って年代に少し補足を加えると、1664年に三姓城が創建され、三姓副都統の設置は1732年である。1905年、依蘭府が設置され、1913年にこれが依蘭県となった。

陳・趙（2001, 4頁）によると、遼が渤海を滅ぼした後、生女真人たちが、松花江沿岸から烏蘇里江（ウスリー川）河口域にかけて五つの部落連盟を形成

した。これが、中国の歴史書などで“五国部”と記されてきたものである。それら五国部の各々が、城と城下町を建設した。それらの名称と所在地を記すと、

剖阿里（現・ロシアのハバロフスク地方）

盆奴里（現・湯原県固木納城）

越里篤（現・樺川県万里河通古城）

奥里米（現・綏濱県敖來密古城）

越里吉（現・依蘭旧古城）

である。剖阿里を除いて、あとの四国部の所在地は、現在は中国黒龍江省内にある。これらのうち依蘭、すなわち三姓の越里吉が首領格だったので、五国頭城と称された。

ここで地名の変遷について述べておくと、依蘭の旧名の一つが三姓である。三姓とは、満州語の依蘭哈喇、ないしは依蘭哈拉の漢語表現である。もう少し詳しくいうと、三を意味する満州語 ilan ないし yilan の発音を漢語で記したのが依蘭であり、姓を意味する満州語 hala の発音を漢語に移し変えた結果が哈喇である。つまり、三姓イコール依蘭哈喇なのであるが、ある時期に哈喇を省略してしまい、依蘭のみが地名として残った。その時期が正確にいつか私にはわからないが、先述のように1905年に依蘭府がおかれたわけで、この時かもしれない。

間宮林蔵が、そこまでは行かなかったものの、『東韃地方紀行』の中でイチャホットと記している場所が三姓であることは前に述べた。もとの三姓城は、明代末期から清代初期には和屯噶珊 (he-tun-ge-shan) と呼ばれていたおり、漢語でいうと古城屯である（陳・趙, 2001, 24頁）。1644年（康熙3）には新しく三姓城が建設された。1729年、三姓副都統衛門がそこにはじめて設けられた。この副都統は、清の視点からいえば、東は庫頁島（サハリン）、北は外興安崕山脈、西はモンゴルに至り、黒龍江、松花江、ウスリー川流域を含む広大な地域を管轄するものであった。そのためであろうか、1733年（雍正11）、城の修理が

なされた。丹治（1993）にも解説があるが、清朝の下では三姓は伊徹霍通（yi-che-huo-tong）と呼ばれたようである。これは満州語の発音を漢字に移した結果であり、羽田享『満和辞典』によると、ice は新しい、hoton は城を意味する（他に、河内（1996）、山本（1969）を参照）。つまり、満州語を漢字で表記すれば伊徹霍通であるが、この漢字四文字それぞれ自体に意味は無く、意味は新しい城、つまり新城である。間宮林蔵は、大陸の人々の会話に、おそらくはひんぱんに出てきたのであろうこの満州語の発音を、イチャホットと理解・筆記したのである。

陳・趙（2001）では、以上のように女真人が五国部を形成したとされるのに対し、ロシアのシャフクノフは、第1節で少しふれたように、それとはまったく別の見解を示している。シャフクノフ（E. V. Shavkunov）は、ロシア連邦科学アカデミー極東支部の下にある極東諸民族歴史・考古・民族学研究所の教授であるが、彼は、先述のように、現在の依蘭に相当する地域に五国城を造った民族はソグド系であったらしい、とした上で、その根拠を次のように述べている。

「その根拠の第一は、五国部民族は言語、衣服、住居、農耕等で南方に住んでいる女真民族と異なっていた点である。言いかえるならば、五国部民族は全ての面でまったく別の民族文化圏に属していたのである。このことに関し“五国部民族は北の野蛮な民族と自由に交流し交易をおこなっている”と記す『契丹国志』を引用するものもなかなかおもしろい。

しかし、北東アジアにソグド人が現れた理由としては、ソグド人が原住民との経済－交易関係の確立を望んだからであった。しかも、最も興味のあるものとして、中国語の訳であるウゴウチェンとは“5つの国の町”、“5つの支配の町”を意味している。しかし、これは“五つの町”、“五つの地域”、“5つの支配”を意味するソグド語の“ピンジケント”を中国語に訳したものと思われる。ソグド人は北東アジアにある大きなソグド集落の一つに遠い故郷を記念してこの名前を付け、中国の歴史家がこの集落名を中国語に訳したものである。

黒貂の道が実際に存在していたという事実を示すものが最近いくつか明らかになっている。その中には、ハバロフスク州郷土博物館に保存されている、ハバロフ

スク州で発見された中央アジアの銀貨がある。この貨幣は、ピローザやワラフラン V 世時代のササニド銀貨の模造品で、7世紀から12世紀にかけて中央アジアで実際に通貨として使用されていたものである。またチタ市郷土博物館の収蔵品の中には、チタ州プリアルガン地区クチ村、すなわちシルク川とアルグーニ川の合流域で出土した、裏面には騎乗者が描かれ、ソグド語かイラン語のような文字が刻まれた銅鏡がある。

同じような鏡は南シベリア・ミヌシンスク盆地でも発見されている。最初の鏡は黒貂の道の東の部分で発見されたがこれは西の部分で見つかっている。」(シャフクノフ, 1993, 94頁)

ササン朝ペルシャの時代には、ゾロアスター教を国教とするソグディアナという国があったことは、世界史上よく知られていることである。そのソグディアナ国はソグド人の国であった。ソグド人の経済活動の中で重要性の高かったのが遠隔交易である。そして、そうしたソグド商人の扱う商品のうち、特に高価だったのが黒貂の毛皮であった。この点に関してシャフクノフは、上記の引用文に先行して、次のように述べている。

「7—10世紀、唐王朝時代の中国でも、アムール河流域や沿海州地域の民族が外国市場へ販売していた黒貂の毛皮に人気があった。アムール河流域や沿海州地域の民族と直接に交易する手段を作りあげていった現在のタジク民族の先祖であるソグド人を通じ、中央アジアやイランの民族にも“挹婁貂”が広く知られるようになったと思われる。その際彼等が開拓した交易路は、すでにその当時から黒貂の道と呼ばれていたようである。当時、交易路の主要な役割は、大変貴重な黒貂の皮などの商品を現地の民族から手に入れ、自国へ持ち帰る通路としてであった。

(中略)

以前、私は歴史的事実に基づいて、黒貂の道はセミレーチェを出発点とし、アルタイ、南シベリア、西モンゴルを通り、セレンガ川へ到り、そこからスルホン川上流を通り、オホンヤケルレン川上流へと向かうコースを想定してみた。これらの川沿いに水路でシルカやアルグナにも行くことが出来、またアムールやスナガリ、ウスリ、更には北東アジアの内陸にも入ることが可能であった。

当然のことながら、ソグド人たちは、遊牧民の襲来から身を守るための避難所や、罹病した動物や川船隊列から脱落したものの補充と交換、入手した商品の選別、梱包のための特別な集落を黒貂の道の各所に多数作る必要があった。このような集落が西モンゴル、セレンゴ、アルホン等に作られた。それらのうちの一つが沿海州でも発見されている。」（シャフクノフ、1993、93頁）

このような意味での黒貂の道、すなわちセーブルロードは、日本列島にも達していた。

「中世の古文書では、中央アジアやイランに侵入したアラブ人征服者がイスラム教改宗を強制し、それを望まなかったゾロアスター教徒は645年、659年、660年、676年に中央アジア・トハリスタンから日本列島へ移住したことが日本の伊藤義教の最近の研究で明らかになった。この移住には最も安全な道が利用された。すなわちトハリスタンのゾロアスター教徒は黒貂の道を通り沿海州に達し、そこからは船で日本列島へ到達したものと思われる。（中略）靺鞨国家渤海が形成され、黒貂の未知の海路の部分は“日本道”と名付けられ、その道の分岐点の一つ所、すなわち沿海州サハリン地区、現在のクラスキン村に渤海州行政府が置かれた。」（シャフクノフ、1993、95頁）

このように遠大な交易路がセーブルロードである。本論考でいう前期セーブルロードについては、ここでは以上のようなシャフクノフの学説の紹介にとどめる。より新しい時代のこととしては、遼の時代に五国部を形成したのが誰なのか、彼の主張するようにソグド人なのか、あるいはそうではないのか、という問題がある。この点については、依蘭をたった一度訪ねただけの私にはまだわからない。ただ、一つだけはっきりしたのは、依蘭の清真寺の立派なただずまいといい、清真飯店をはじめハルピン市内のあちこちで見かけた清真という文字といい、現在の黒龍江省においては回族の文化が生きている、という点である。そういう中でソグド人に関係しそうな文物は見つからなかった。この点については今後の研究課題にするとして、次に見ておきたいのが、五国城成立

以後の依蘭地域である。

5 帰国してから見えてきた徽宗の幽閉期

依蘭を訪ねて最も驚いたのは、そこが徽宗終焉の地であったという、私にとってはまったく意外な史実である。徽宗が宋の皇帝である一方で優れた画家であることは、高校生のときからよく知っていた。実際、その原画も日本国内の展覧会で幾つか見たことがある。また、東洋美術関係の画集で彼の絵がまったく紹介されていないということはまずない。宋といえば、それだけで馬遠や牧谿の絵と並んで徽宗の花鳥画などを想いおこすのは私だけではなからう。

徽宗は帝位に就きながらも政治にはほとんど関心がなく、民衆の生活を犠牲にして日夜遊興にふけていたという。それで暗愚の人とされることもあるわけだが、原画に接したり、書を写真で見るとするとき、極めて非凡な才能に恵まれた人であったことは明白である。自ら優れた画家であったばかりでなく、画院を開設して画家の育成にもあたっていた。そして、“風流天子”であることを自他共に認めていたようである。東洋史に疎い私は、依蘭を訪ねるまでは、徽宗は風雅な皇帝として生涯を全うしたものと思いこんでいた。しかし最後の八年間、彼は悲劇の人となったのである。

依蘭を訪ねて、何やらそこが徽宗とその子の欽宗に関係する土地であるらしいことがわかり、帰国してからいくつか文献を読んでみた。それでようやく事情が少しわかってきた。

宋の建国は960年である。当時の北東アジア、中央アジアを見ると、宋の北には契丹人の築いた強力な国として遼があった。その西には、タングート(党項)族の国・西夏があった。その北東方面には女真族が勢力を伸ばしていた。それらが、潜在的には常に宋を脅かしていた。

そうした勢力のうち先ず女真族をみると、その祖先は靺鞨である。唐の初期に靺鞨は、黒水靺鞨と粟末靺鞨の二部を成すようになった。これらのうち粟末靺鞨は、698年、渤海国を建国した。他方、黒水靺鞨が後日の女真であり、五

代十国の時代（907—960）にその名を得た。そして、主として混同江（現・松花江）より南で生活し、契丹戸籍をもつ人々は熟女真と呼ばれ、主としてそれより北にいて契丹戸籍をもたない人々は生女真と呼ばれた。生女真の生活空間は混同江北岸一帯から長白山、黒龍江にかけての、いわゆる「白山黒水」の間であった。生女真そのものが複数の部族に分かれていたが、完顔部の阿骨打という人物がそれらを統一した。そして、1115年（遼の年号で天慶5年）、按出虎水（現・黒龍江省阿南市）にて自らを帝と名乗り、大金国の建国を宣言した。この完顔部阿骨打が金朝の太宗に他ならない（郭，2001，3頁）。

以上で女真族の歴史を略述したが、契丹族についてはどうか。契丹族は古くからの遊牧民族であり、北東アジアの鮮卑族の子孫と考えられている。北魏の時代（386-533）に初めて自らを契丹と称するようになった。唐代後期には、大賀氏を首領とする連盟をなし、916年、耶律阿保機が契丹国の樹立を宣言した。これが遼王朝の始まりである。この国は日々軍事力を増強し、926年には渤海国を滅ぼし、今日のモンゴル東部からロシア沿海州に相当する地域にいたる広大な地域に支配力を張りめぐらした。遼は、漢民族の文化的要素も取り入れた王朝であり、その経済的基盤は遊牧と農耕であった。遼はまた、女真族をも自らの影響下に置くことに力を入れ、彼等に貂皮、名馬、良犬、海東青を持つての朝貢を迫った。第6代皇帝・聖宗の時代が遼の最盛期で、その影響力は、西は中央アジアからペルシャ周辺まで、東は高麗にまで及んだ。しかし、その後影響力は次第に縮小し、内部からの反乱が相次ぐようになった。また、遼と宋の境界地帯でも紛争が拡大した。

遼の支配下にあつて自立を求めた女真族は、先述のように自らの王朝・金を樹立した。他方、遼に悩まされてきた宋においては、徽宗帝の時代になり、遼の力を退けるためには女真族と手を組むのが得策、という建議をするもの（馬植、改名して趙良嗣）がいた。この建議を受けて宋と金の間で結ばれた盟約を“海上之盟”といい、それは、“聯女真攻遼”，すなわち女真と連合して遼を攻める策略であった。これによって金は、力の弱まっている遼を攻めても宋と対

立する恐れはないと判断し、遼の攻撃に移った。そして、1125年、第9代皇帝・天祚帝を捕らえて遼を滅亡に追い込んだ。

ところで、強大この上なかった遼が減びると、金と宋は、直接に対峙する二大勢力となった。そして、金は宋を攻撃する機会を狙った。金が攻撃準備中であることを感づいて、徽宗は自分の子に帝位を譲った。それが欽宗である。

1126年1月5日、金軍は、宋の当時の都である汴京の攻撃を開始した。汴京は、いまの河南省開封市に当たる。城は二重になっていて、金軍は外側の城を攻め落とした。しかし、外城の中には内城と皇城とがあり、徽宗 (Hui Zhong, 1082-1135)、欽宗とその宗室、家臣らは皇城に引きこもり、宋の兵士たちに守られた。金軍は、2月12日とも3月3日ともいわれる日にいったん退却した。とはいえ、その退却は一時的なものであった。同年11月には再び汴京の攻略を試み、25日、内城、皇城も落とした。これに伴い、徽宗と欽宗とその宗室、家臣らは囚われの身になり、すでに金軍が占拠していた郊外の青城に監禁された。その年が宋の年代で靖康年であったため、この事件は「靖康の変」と呼ばれる。囚われの身になった人々の数は約14,000人とされる。彼等は、七つの組に分けられ、組ごとに遠い北方に送られることになった(郭, 2001, 9頁)。

1127年3月末から4月1日にかけて、徽宗一行、欽宗一行は別々のルートで燕京(現在の北京)に向けて出発させられた。徽宗一行は、5月18日に燕京着、延寿寺に収監された。遅れて7月10日には欽宗一行が燕京に到着し、愍忠寺に収容された。9月13日には、全体が燕京を出て、中京に向かわされた。中京は、いまの内モンゴル自治区赤峰市の考河左岸の街である。

金の太宗は、1128年7月、中京に拘禁中の徽宗・欽宗父子らを上京に移すことにした。金の建国の地は先述のように按出虎水であるが、そこが金国の首都となり、上京と呼ばれるようになっていたのである。彼等は7月23日に中京を発ち、8月21日に上京に到着したことが知られている。しかし、上京への留置は約2ヶ月で終わり、彼等は、10月末に上京を発たされた。行き先は韓州(現在の遼寧省昌図県)であり、そこに12月27日に着いた。

それから約1年半後の1130年7月、彼等は五国城へ移されることになった。46日間の行程で、9月2日にそこに到着したことが知られている。1127年春に汴京を發たされ、遠路各地を引き回された後に五国城に着くまでに3年半近くの月日が発っていた。徽宗の皇后・鄭氏は、到着3日後に死去した（郭，2001，34頁）。

長旅の後の五国城到着は、そこで捕囚たちが原野に解放されることを意味しなかった。彼らはそこに幽閉されたのである。その時期の徽宗の詩の一つに「思断腸」がある。

一	二
徹夜西風撼破扉，	九叶鴻基一旦休，
肅条孤影一灯微。	猖狂不听真臣謀。
家山回首三千里，	甘心万里為降虜，
望断天南無雁飛。	故国悲涼玉殿秋。

これは、“坐井觀天”の名でも知られる詩で、中国語の知識に乏しい私にさえ、痛切な想いをいだかせる。補囚の中に徽宗が反乱を企てているといいふらす者がいたが、それは自分の息子であった、という事情もあったらしい。そういう幽閉生活の中、1135年4月27日、徽宗は病を得て死去した。享年54歳であった。

6 中国の種々の歴史書に登場する依蘭の黒貂

本題から脱線し、徽宗の最期を理解する作業が長くなった。ここでクロテンに論をもどす。

依蘭現地で買い求めた書物の一つである陳・趙（2001）には、依蘭県の天然資源の現状に関する記述があるだけでなく、歴史上の特産物についての記載もある。それらの一つに毛皮類がある（同上，149-153頁）。そこでは、貂皮、鼠皮、

水獺皮，猓獺皮，狐狸皮，兔皮，海東青，雕が挙げられる。これらのうち貂皮の項では，およそ次のように述べられている。

“貂皮は依蘭の特産品であり，皮革商店街もある。それには，草鞞，青鞞，紫鞞の三種がある。あるいは，草白駟，七星毛，黄眼圈，紫貂など七ないし八種に分類されることもある。依蘭東部山中の七星河流域は，紫鞞の産地として知られ，その毛皮は最も貴重であるとされている。清の時代には，これは重要な貢納品であった。古い詩の中に，「吉林又貢紫貂袋」という表現があることからその点がわかる。

依蘭には，貢貂諸部という役所の部局がかつてあって，これは，俗称では打狐狸部であった。諸部は，毎年紫黒色の貂皮を選び出し，北京に向けて2600張を進貢した。それを以って，通商貿易を行ったのである。

依蘭の貂は古来有名で『後漢書』の第15巻には，「挹婁は良質の貂を産出する」旨の記載がある。『魏書』には，「貂は紫黒色のものが最も貴ばれ，青色のものがそれに次ぐ。女真人は貂皮をもっており，それはカワウソ（獺）の尾のようで，毛深く，彼らは冬にはそれを着用している。」などと述べている。さらに，「風があつてもそれを着ていると暖かく，水を弾いて漏れない。雪が降っても，すぐ地面に落ちてしまう。珍品である。」などと述べている。

『唐書』第219巻は，「黒水靺鞨は貂鼠を多量になめし，開元・天宝年間にはそうした貂鼠を献上した」旨を記している。『契丹志』第26巻は，『魏書』と同じく，「貂は紫黒色のものが貴く，青色のものがそれに次ぐ」としている。『盛京通志』は「貂鼠について言えば，今では三姓，琿春および寧古塔の山林に多数棲息しており，毛の色は黄，あるいは紫黒で，その皮はとても軽く暖かい。それを狩る人々は，雪の日にその足跡をたどって捕獲する」と述べている。

『扈双日録』には，「貂鼠は深山の森林に棲息し，洞窟を作ったり，地面に穴を掘ったり，あるいは樹に穴をあけるなど，そういう所に住んでいる。狩猟者は，そうした穴の入口に網を張り，草を燃やすなどして煙を発生させる。そうすると，貂は煙に巻かれまいとして穴の外に脱出しようとする。それを網中

にしてしまうのである。貂皮から得られる利潤は、彼らの衣食をまかなうのに十分である。このために、金の歴史書はそこが富庶（たいへん豊か）であると述べている。」という旨の記載がある。『柳辺紀略』は、「犬にその穴を守らせる場合もある。犬はその内部をうかがい、貂が出て来たら、噛んで捕えるのである。」との旨を記載している”（陳・趙（2001，150頁））。

陳・趙（2001）によると、清朝の下では、黒龍江流域からの朝貢品として、貂皮が最も重要であった。“依蘭で貂の猟を行う人々は、一般的には8月に山に入り、12月に下山した。多くの場合、雪の日に足跡を追って貂を捕獲した。その方法は数多く、打ちのめしたり、わなを仕掛けて挟んで捕えたり、矢でしとめたり、網にかけたり、と様々であった。1949年の中国革命後は、貂の人工飼育が始められ、その効果はすこぶる良好である”（同上，150頁）。

以上から、ある時代まで、依蘭一帯それ自体が黒貂の棲息地であったことがわかる。そこに後期セーブロードの一端が展開することになるのである。

【以下、(2)に続く】

謝 辞

中国黒龍江省および吉林省への現地調査旅行（2002年1月）は、2001年度同志社大学学術奨励研究費の助成によって可能になった。記して感謝する。また、林永輝氏には、両省内各地の案内、通訳、帰国後の文献読解補助など、あらゆる点で多大なお世話になった。さらに、デジタル画像の処理については春木千琴氏の協力を得た。両氏に深い感謝の念を表すものである。

【参考文献】

- 郭致超編，（2001）『五国城与徽欽二帝』依蘭県：黒龍江省新聞出版局。
陳立安・趙曉明，（2001）『走進依蘭』依蘭県：黒龍江省新聞出版局。
河内良弘，（1996）『満州語文語文典』京都：京都大学学術出版会。
中村小市郎，（1982：原著1801）「唐太雑記」，高倉新一郎編『犀川会資料 全』札幌：北海道出版企画センター，pp. 597-650。
間宮林蔵・述，村上貞助・編，（1988）『東韃地方紀行他』（洞富雄・谷澤尚一編注）東京：平凡社（東洋文庫484）。

- 周麗燕・王鉄軍編, (1999)『黒龍江省地図冊』哈尔滨: 哈尔滨地区出版社.
- 佐々木史郎, (1997)『北方から来た交易民——絹と毛皮とサンタン人』東京, 日本放送出版協会.
- シャフクノフ, E. V., (1992)「12世紀および13世紀初葉の Sable Road (黒テンの道) 沿線の中央アジア, 沿海州地域の人々の通商活動に関する新知見」『1991年度 北の歴史・文化交流研究事業 中間報告』札幌: 北海道開拓記念館, pp. 57-59. (英文, pp. 51-55)
- Shavkunov, E. V., (1992) New data pertinent to commercial and business intercourse between peoples of Middle Asia and peoples of Primorye Area along the Sable Road during the twelfth century and the first third of the thirteenth century. その岩田圭示による訳が上記.
- シャフクノフ, E. V., (1993)「北東アジア民族の歴史におけるソグド人の黒貂の道」(鈴木明美訳, 海保嶺夫監修), 1992年度 北の歴史・文化交流研究事業 中間報告』札幌: 北海道開拓記念館, pp. 93-98.
- 宋忠栄・孫維勳, (2001)『依蘭歴史文化概略』依蘭県: 黒龍江省新聞出版局.
- 丹治輝一, (1991)「清代中国東北部の重要拠点寧古塔について」『1990年度 北の歴史・文化交流研究事業 中間報告』札幌: 北海道開拓記念館, pp. 69-76.
- 丹治輝一, (1994)「清代中国東北部の重要拠点三姓について」『1993年度 北の歴史・文化交流研究事業 中間報告』札幌: 北海道開拓記念館, pp. 51-63.
- 山本謙吾, (1969)『満州語口語基礎語彙集』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.